切れ者エリートは初恋の恋人を独占愛で甘く搦め捕る

プロローグ

時刻は十六時ちょうど。アルバイトの時間まで、あと一時間だ。
小島志穂は、棚に置いた時計で時間を確認しながら、図書館から借りた本を小さなテーブルの横に積み上げ、夏休み明けに提出するレポートを仕上げていた。
けれど集中力はもたず、ついスマートフォンに触れてしまう。
アプリを開き、彼からのメッセージを何度も見つめる。
『今日は楽しかった。また出かけよう』
『身体、辛くなかったか？　今度泊まるときはちゃんと前もって言うから』
『今日はバイトだよな？　俺はサークルに顔を出してくる。明日は俺がバイトだから、会えないな』
数日前から今朝早くまでの間に届いたメッセージを読み返して、志穂は幸せなため息をついた。
先日、恋人である惣と初めてホテルに泊まったときのことを思い出すと、一足早く誕生日プレゼントをもらったような気分になる。
付き合ったばかりの恋人は、明日が志穂の誕生日とは知らないが。

（明日ちょっとでも会えたら嬉しかったけど、バイトなら無理かな。それに、付き合ってまだ一ヶ月しか経ってないのに、誕生日に会いたいなんてプレゼントをねだってるみたいだしね）

宮川惣――彼は同じ学部の三つ上の先輩だ。彼との出会いは、惣の友人が作ったというインカレサークル。

彼は、友人や後輩、男女にかかわらずみんなから頼りにされ、常に輪の中心にいるような人で、外見も立ち居振る舞いも目を引く男だった。

一人でいる方が好きで、友人も少ない自分とは正反対である。

（惣が、私を好きとか……いまだに信じられないんだけどね）

圧倒的な存在感と爽やかな外見も相まって、彼は非常にモテる。そんな惣から「好きだ」と告白されて付き合い始めた。

最初は、もしかして騙されて、遊ばれているのでは、という懸念を持っていたけれど、そんな予想に反して交際はとても順調だった。惣と交際して初めて、志穂は誰かと楽しみを分かち合うのも悪くないと思えるようになったのだ。

そのとき、スマートフォンがアラーム音を鳴らす。

あと十分でアルバイトに出なければならない時間だった。

志穂は出かける前に、姿見で全身をチェックする。見慣れた地味顔にため息が漏れる。

（二卵性の双子でも、姉妹なら果穂ともう少し似ていてもいいじゃない）

双子ではあるが、自分たちは中身も外見もまったく似ていない。華やかで目鼻立ちの整った果穂と違い、童顔でのっぺりとした顔の自分。

真っ直ぐで艶のある果穂の髪と違い、父に似て癖が強くセットしなければ広がる志穂の髪。滲刺としていて甘え上手な果穂と、口下手で人に頼ることが苦手な自分。

比べるのもいやになるくらい、なにもかもが真逆である。

果穂が年の離れた妹だったら比べられなくて済んだかもしれないのに、と肩を落とす。

「やば。もう行かなきゃ」

鏡に映る時計を見て、志穂は肩の下まで伸びた髪を手櫛で整えてヘアゴムで結んだ。手に持ったバッグにスマートフォンをしまい、玄関に向かおうとしたところでインターフォンが鳴り響く。

（あれ、お母さんからの宅配便かな？　なにか届くとか言ってたっけ）

志穂の住む部屋は、インターフォンにカメラがついていない。とりあえず応答するしかなく、ボタンを押すと、聞き慣れた身内の声がスピーカー越しに響いた。

『私、ちょっといいかな？』

いいかな、と問いながらも、志穂が断るとは思っていない傲慢な態度に、いつものことながらため息が漏れる。志穂はもう一度時計を見て、バッグを手にしたまま玄関に向かった。

「ちょっと待って」

果穂が志穂の部屋に来るなど珍しいこともあるものだ。

彼女の住む大学の寮と志穂のアパートは同じ市内にあるものの、電車とバスの乗り継ぎが面倒で、行き来するには時間がかかる。

（用があるならサークルで会えるのに）
「出かけるところなの？　その格好で？」
玄関のドアを開けた志穂の全身を、果穂は上から下までチェックして、あり得ないという顔をする。そしてサンダルをぽいぽいと脱ぎ捨てて、勝手に部屋に入ってきた。
「うん。これからバイトだから、今から行かなきゃいけないの」
「大事な話があるから来たんだよ？　休めないの？」
果穂は、志穂が自分に従って当然とばかりに口にする。艶やかな唇に爪の先まで綺麗に整えた指を押し当てながら、首を傾げた。
休めないの、と質問している風ではあるが、実質命令に近く、話が終わるまで果穂は帰らない。こうなったら遅刻を覚悟して果穂の話を聞かなければならないのだ。
「急に休んだら迷惑がかかるから」
「もう、せっかく志穂のために話をしに来たのに。なるべく早く話さなきゃって思って、宮川先輩と会って、そのまま来てあげたんだから」
果穂は頬を膨らませ、わざとらしくため息をついた。
（惣と……会って？　サークルのことで用事でもあったのかな？）
果穂は惣と志穂とは別の大学だが、あとから同じサークルに入ってきた。
「話って？」
「志穂が恋人だと思ってる、宮川先輩のこと」

恋人だと思ってる、とはどういう意味だろう。本当は違うとでも言いたいのか。思わず眉を寄せた志穂を見て、果穂は楽しそうに口元を緩めた。
「惣が、なに？」
含みのある果穂の言葉に苛立ち、志穂は先を促す。
「あのね……宮川先輩とは、別れた方がいいと思う」
果穂がなにを言っているのかがわからず、志穂は言葉を失う。果穂はそんな志穂を窺うように見つめて、申し訳なさそうに視線を落とした。
「言いにくいんだけど……宮川先輩が志穂に告白したのはね、志穂が交際をＯＫするか友達と賭けてたんだって聞いちゃったの。ほら、志穂って冷めてるじゃない？　それで、先輩の友達が志穂を落とせたらおもしろいって悪ふざけしちゃって、その人を止めるために仕方なくだったんだって。先輩も、まさか志穂がＯＫするとは思ってなくて、すぐに冗談だって言おうとしたけど、タイミングをなくしちゃったみたい。別れたいけど、騙した手前、志穂が可哀想で別れられないって、宮川先輩が困ってるの」
惣が賭けで自分に告白したなんて、別れたいと思っているなんて、信じられなかった。だって惣からは今朝、会えなくて残念だというメッセージが届いたばかりだ。
「……それで？」
「それで、じゃないよ！　だから志穂は冷めてるって言われるんだよ。そういうところ直した方がいいと思う！」

「話の論点がずれてる。結局、なにが言いたいの？」
「普通わかるでしょ、もう！　志穂は私の気持ち知ってるでしょ？　私もずっと、先輩が好きだったって」
果穂がサークルに入ってきたのは、志穂と惣の距離が友人以上になり始めた頃だった。
惣が果穂と付き合ってしまうのではないかと、サークルの集まりのたびにハラハラしたものだ。
だが惣は、果穂にどれだけ言い寄られても、デートに誘われても、決して頷かなかった。それどころか、ずっと好きだったと志穂に告白してくれた。彼のその行動が、果穂の存在を不安に思う自分を安心させるためだとわかって、嬉しかったのを覚えている。
だが果穂は、二人が交際し始めたのを知りながら、さも惣の隣は自分の場所とばかりに彼に纏わり付いていた。
「うん、知ってる……でも」
「あのね！」
果穂は志穂の言葉を遮るように言葉を続けた。
「今日……先輩に二人で会いたいって言ったら、会ってくれて……それで、告白されたの。宮川先輩、本当はずっと、私のことが好きだったって。志穂に申し訳ない気持ちはもちろんあるけど、ほら、お互いに気持ちがないのに付き合ってたって、どっちも不幸になるだけだし。それなら、早く別れてもらった方がいいかなって、私が志穂に伝えに来たんだ」
「そんなの、信じられないよ」

「でも本当だもん。志穂と顔を合わせたら可哀想になっちゃって言えないから、宮川先輩は私に相談したんだよ。ほら、見て」
果穂がテーブルの上にスマートフォンを置き、メッセージを見せてくる。
『会いたいです。私の気持ち、気づいてますよね？』
そんなメッセージから始まった惣と果穂のやりとり。驚くべきことに、その内容は果穂の言葉を裏付けるものだった。志穂は信じがたい気持ちで、何度も二人の会話を読み返す。
『二人で会ってくれませんか？』
『わかった。ちょうどよかった、俺も話があるんだ』
『デートですね、楽しみ』
『あとでな』
メッセージの時刻は数時間前。惣は、二人で待ち合わせ場所を決めて、デートだと喜ぶ果穂のメッセージに対して『あとで』と応えていた。
（本当に……二人きりで会ったんだ……）
二人で会ったのも、彼が賭けで志穂と交際した話も、果穂の作り話だと思っていた。
けれど、果穂が言うように、彼は本当に仕方なく志穂と付き合っていたのだろうか。優しくしてくれたのも、騙している罪悪感からだった？
「明日、私たちの誕生日でしょ。宮川先輩、お祝いをしたいって言ってくれたの。私も、明日は先輩と二人で過ごしたい。だから志穂、先輩と別れてほしいの」

果穂は両手の指を合わせて、上目遣いに此方を見つめた。
（惣……私が誕生日だって知ってたんだ。明日はバイトがあるって、会えないって言ったのは……果穂と約束してるから。そっか……果穂と二人で、過ごすんだ）
そして、私と別れたら、果穂に好きだと言うのだ。自分にしたように果穂にも触れるのだろうか。想像すると、胸がぎりぎりと締めつけられるように痛む。嫉妬と羨望と遣る瀬なさで、頭の中が真っ黒に染まりそうだった。
もしも志穂が誕生日に一緒に過ごしたいと言っていたら、どうなっていただろう。志穂を騙した罪悪感から一緒にいてくれただろうか。
「ねぇ、聞いてるの？」
「……聞いてる。話がそれだけなら、そろそろバイトだからいい？」
志穂はどうにか平静を取り繕い、言葉を返した。
果穂に退出を促すと、思っていた反応とは違ったのか、拗ねたような顔で詰られる。
「別れてくれないの？　私のことはいいよ。でも、宮川先輩、辛そうだったよ。志穂を騙して、申し訳ないって。ねぇ、宮川先輩が可哀想だよ……もう解放してあげなよ」
騙されていた志穂は可哀想ではないのだろうか。
今、口を開けば、果穂になにを言うかわからない。嫉妬を剥き出しにして怒鳴ってしまうかもしれないし、惣を奪わないでと泣き叫んでしまうかもしれない。
だから志穂は黙ったまま玄関で靴を履いた。その後ろから果穂がついてくる。

「志穂ってば」
「……別れるよ」
嘆息しながら答えると、背後で果穂が安心したように笑った気配がした。
「そっか。宮川先輩からは言い出せないと思うから、志穂から別れるってメッセージを送ってあげて。私ね……先輩が好きだけど、志穂を騙したのはちょっと怒ってるんだ。ああいう誰にでも優しい人には気をつけた方がいいよ。志穂、すぐ勘違いして騙されそうだから。あ、そうだ。志穂がサークルを辞めることもちゃんと伝えておいてあげるから、心配しないで」
「うん」
志穂は疲れ切った心地でため息を押し殺し、頷いた。なにもかもがどうでもよくて、果穂の顔を見ていたくなかった。早く一人になりたかったのだ。
「じゃあ、よろしくね」
果穂はその言葉に満足した様子で、志穂より先にアパートを出て、笑顔でバイバイと手を振った。
志穂もアパートを出て、自転車でアルバイト先に向かう。ひどいことをたくさん言われたはずなのに、麻痺してしまったように心は凪いでいた。
（もう、終わっちゃうんだ）
この先、二人で手を繋ぐことも、キスをすることも、抱き締められることもない。
たった一ヶ月で終わってしまうのなら、せめて誕生日だけは一緒に過ごしたかった。
（やっぱり……あんな人が、私を好きだなんて、あるわけなかったのかな）

ぎゅっと唇を噛みしめると、痛みで目の前がぼやけていく。
裏切られていたと聞いても、彼を好きな気持ちはちっともなくならない。いっそ嫌いになれたら、こんなに苦しまずに済んだだろうか。
（果穂……惣と、付き合うんだよね）
サークルを辞めたとしても、果穂ならば自慢げに写真を送ってくるくらいはするだろう。もしかしたら実家に連れてくることもあるかもしれない。
（そんなの見たくない……付き合った二人となんて、絶対に会いたくない）
こんなことになると知っていれば、彼を好きになどならなかった。彼と身体を重ねなかった。たった一ヶ月の交際期間でも、志穂にとってはなにもかもが初めてだったのだ。
別れを考えると胸が苦しくて、涙がぼろぼろとこぼれ落ちる。
道行く人が、しゃくり上げる志穂を胡乱な目で見てきた。
「う……ぅ……っ」
息を吐くごとに涙が込み上げてくる。
どろどろとした感情が溢れ出しそうだ。果穂に対する嫌悪感が抑えきれない。顔も見たくないし、話もしたくない。彼らが並んでいる姿を想像するだけで、苦しくて耐えきれない。果穂さえいなければ——そんな風に思ってしまう。
果穂を恨んでしまいそうな自分が怖かった。
志穂はその日の夜、惣に最後のメッセージを送り、連絡を絶った。少しの期待もしないように、連絡先をブロックする。
そしてすぐに、果穂へ「惣と別れた」とメッセージを入れた。
果穂からの返信を見たくなくて、果穂の連絡先もブロックした。
そうして志穂の初恋は、たった一ヶ月で終わったのだ。

第一章

クリスマス間近の十二月某日。
志穂が働くアイディールシステム株式会社の開発事業本部内でも、クリスマスの過ごし方が話題に上がっていた。
今年はクリスマスイブが土曜日のため、家族や恋人がいる人たちは特に浮き立っている。志穂は会議室のテーブルに広げた弁当をちまちまと食べながら同僚たちの話を聞いていた。
「実はね、彼がクリスマスイブに高級フレンチを予約してくれたんです」
隣に座った開発事業本部の後輩、上園奈々は、スマートフォンにフレンチレストランのホームページを表示させて、大きな目を輝かせながらコロコロと笑った。奈々の目の前に置かれた手作り弁当は彩り豊かで、茶色いおかずを詰め合わせた志穂の弁当と違って見栄えがいい。
「小島さんは、彼氏いなかったんでしたっけ？」

「うん」
「ですよね～」
アイディールシステムは、ソフトウェアやアプリの開発を手がけており、品川区に本社を持つ大企業だ。委託を含めた在籍エンジニアは千人以上、リモートでの勤務も多い。志穂は開発事業本部のＵＩデザイナーとして勤務している。奈々は志穂の二歳下で今年二十五歳だ。
奈々は仕事の面ではやや頼りないところがあるものの、華やかな見た目に庇護欲を刺激されるおっとりとした話し方をする女性で、年嵩の上司や男性社員に人気が高かった。
「へぇ～ここって超人気フレンチじゃないっすか！　彼氏、めっちゃ甲斐性のある男っすね。ね、志穂さんもそう思いません？」
向かい側に座る松浦晃は、奈々のスマートフォンを覗き込みながら志穂にも話題を向けてくる。
奈々の恋人の話を聞くようになって半年ほど経つだろうか。
たしか、誕生日やハロウィンにも高級レストランに行ったと言っていた。顔が可愛いだけではなく甘え上手な彼女のために、恋人が超人気レストランを予約するのもわかる。
果穂と性格のよく似た奈々と話していると、古傷をちくちくと抉られて卑屈な自分が顔を出しそうになるが、学生の頃とは違い、それを上手く隠す術も身につけた。
もともと感情を表に出すのは苦手だし、培ってきた仕事の経験による自信が卑屈さを上手く隠してくれている。相変わらず他人と必要以上に仲を深めるのも得意ではないものの、大人になるとその方が楽に生きられるのだと知った。

実家から足が遠のいている志穂は、あれ以来、果穂とほとんど顔を合わせていない。メッセージアプリをブロックしたことで果穂も察したのか、向こうからの連絡も途絶えている。
過去の件をいまだに引きずっているわけではないが、一度空いてしまった距離を縮めるのは簡単ではないし、志穂としても今さらだった。
「うん、羨ましい。上園さん可愛いから、恋人の気持ちもわかるよ」
「そうなんですよ～。彼、私にベタ惚れで」
羨望の目を向けて言うと、奈々は満足そうに唇の端を上げた。
奈々の持ち上げられて満足する性格も果穂を彷彿とさせるのだが、素直に感情が顔に出るところは羨ましいし、可愛いと思う。
「羨ましいなら、俺が志穂さんを連れていってあげますって」
「私より自分の恋人を連れていってあげたら？」
松浦から初めて「志穂さん」と呼ばれたときは驚いたが、彼は誰に対しても人懐っこく距離感が近い性格なのだろう。奈々と同じで二歳しか違わないのに、この二人と話していると自分が老成しているように感じる。最近の若い子は……なんて年ではないのに。
松浦の言葉を適当に受け流しながら、志穂も恋人との予定に思いを馳せた。
（今年のクリスマスは土日だから、隆史さんから連絡があるかな。まぁ、なかったらないでいいか……）
恋人の隆史はあまりマメな性格をしておらず、気分屋でもある。プライベートの予定を前もって

立てるのが苦手なのか、前日や当日に誘われることが多い。予定を立てると、当日になって出かけるのが面倒になってしまうらしく、デートは志穂の家ばかりだ。

去年は、十二月二十四日が金曜日の平日で、二十五日は隆史の予定が空いておらず、家には来なかった。今年はどうだろう。

誰かと過ごすイベント事がいやなわけではないが、一人の方が慣れているし気が楽だ。クリスマスはいつもよりもちょっと贅沢に過ごしている。去年はコスメティックブランドから出ているアドベントカレンダーを毎日開けつつ、当日はチキンを焼いてケーキを一人で食べた。

去年は自分用にバスソルトと高級枕を買ったから、今年はジグソーパズルを買って年末年始に完成させようと思っている。

（もし隆史さんから連絡が来ても、たぶん家でだらだらするだけだし。家だと楽でいいよね。人混みとか無理だし）

志穂が同じ部署のプロジェクトリーダーである井出隆史と付き合ったのは、彼が開発事業本部に異動してきた二年前だ。会ってすぐに、自分に交際を申し込む変わった男性だと思ったのが最初の印象。

しかし、仕事が忙しいときは一週間、二週間プライベートで会わないことも多く、電話やメッセージもごくわずか。外に出るのも煩わしいという性格の隆史とは、そういうところが妙に合った。惣のときの気持ちとは違うけれど、もしかしたらこの人となら上手くやっていけるかもしれない、という希望が持てた。だから告白を受け入れた。

実際、隆史との交際は楽だった。家に泊まることもほとんどなく、食事をしてセックスをしたら帰る。頻繁な連絡もない。一人の時間を大切にする志穂にとって、これ以上ない相手だ。

（美味しいご飯は食べたいから、ちょっと豪華なケータリングでも頼もうかな。二人分頼んで、隆史さんが来なかったら、土日で食べればいいし）

結婚の話も出ていたが、仕事での関わりも密にあるため、まだ社内で交際は公にしていない。

「あ、そうそう……小島さん。実はあとで重大発表があるので、楽しみにしていてくださいね」

奈々は、空の弁当箱を可愛らしいキャラが描かれた保冷袋に入れると、松浦に聞こえないように声を潜めて顔を近づけてきた。

「重大発表？」

志穂が聞き返すと、奈々は可愛らしく人差し指を口の前に立てて「今は言えません」と言った。

そのとき、彼女の香水の匂いがふわりと鼻をくすぐる。

爽やかなユニセックスな香りは、どことなく奈々のイメージとは違う。

（この匂い……どこかで嗅いだことあるような？）

志穂の周りで好んで香水を付けるのは隆史くらいだ。そういえば彼は最近、香水を変えたと言っていた。同じ香りに思えるが、そこまで自信はない。

（隆史さんもブランド物が好きだし、もしかしたら有名な香水なのかも）

志穂は、ブランド物にあまり興味がない。ブランド物じゃなくても、シンプルで質のいい物が好きだ。アクセサリーもほとんどつけない。

嫌いではないのだが、装飾品で着飾っていた果穂を思い出すと、どうせ自分には似合わないと手に取るのをためらってしまう。

化粧もおとなしめで、やや太めに書いた眉に、ほんのりとピンクになる程度のアイシャドウを目元に載せている。目が大きいため、マスカラもアイライナーも引いていない。

仕事中は、緩くパーマをかけた髪を高いところで一つにまとめている。どう頑張ってもさらさらストレートにならないならと、憧れを捨て楽な髪型にした。手は抜いていないのに地味に見えてしまうのは、もともとの顔立ちのせいだけでなく性格もあるのだろう。

そういえば果穂には、地味だの、幸薄そうに見えるだのと散々言われたなと思い出すが、果穂と自分は違うと開き直れるくらいには、妹とのことは自分の中で過去になっていた。

（それに、うちの部署って目立つ人が多いから、気にしてたらキリがないし）

隆史然り、奈々然り。そして目立つ筆頭といえば、アイディールシステムに取締役としてヘッドハンティングされてきた、開発事業本部長でもある宮川惣だ。

（まさか、会社で惣と再会するなんて思わなかった）

凛々しく男らしい顔立ちに圧倒的な存在感。くせのないストレートの黒髪は左右に分けられているが、昔は真っ直ぐに前髪を下ろしていた。

ヒールを履いた志穂よりも頭一つ分は高い身長に、整った顔、体躯の良さも相まって、恋人の座に収まろうとする女性は相変わらずあとを絶たない。

ただ、女性と親しくしている様子もなく、アイディールシステムに来て約九ヶ月、誰一人として

恋人の座を射止めた女性はいないため、その誠実さから人気は高まる一方だ。

穏やかな話し方で冗談を交えつつ部下に接しているわりには、プライベートにはいっさい隙がないという話もよく聞く。

彼が三十歳にして取締役に就いている実力は伊達ではない。頼りがいがあり、誰にでも分け隔てなく接するところも、その優秀さも大学時代となんら変わっていなかった。

話しかけられると、うっかり昔を思い出してときめきそうになるが、それだけだ。

（惣は……覚えてすらいなかったんだから）

大学時代に交際していた惣と再会したのは、彼がアイディールシステムにヘッドハンティングされた今年の四月のこと。

社長の紹介で壇上に立った惣を見たときは驚いたものだ。

なんの因果か惣は開発事業本部に配属され、挨拶の際に目が合ったが、彼は志穂に気づきもしなかった。

志穂は弁当箱を片付けながら、隆史には言えない初恋の日々を思い出し、目を細くする。

大学時代に志穂が所属していたインカレサークルは、本好きな人との交流を目的としたかなり緩いサークルだった。

志穂は、そもそもサークルに入るつもりはなかった。人付き合いが苦手で小中高で友人と呼べる相手はほとんどおらず、話し相手といえば双子の妹である果穂くらいだった。

それなのに、たまたま教養ゼミで隣に座った別学部の女子生徒に強引に誘われ、気がついたら入

部することになっていたのだ。
そして、新歓バーベキューなどという、志穂にとっては苦痛でしかない陽キャの集まりに参加させられ、さっさと退部届を出そうと心に決めたとき、惣に出会った。
スマートに誰に対しても分け隔てなく接する彼は、サークル内で存在感の薄い志穂に対しても優しかった。彼は、サークルを辞めようとしていた志穂を引き留め、一人にならないように常にそばにいてくれた。
そんな昔の初恋を思い出すと、別れを告げたときの記憶が蘇る。けれど、あの頃に感じた苦しいほどの胸の痛みはもうない。ただただ、優しく幸せな思い出が記憶に刻まれているだけだ。
過去の思い出に耽りながら席に戻る頃には、奈々が口にした重大発表のことなどすっかり志穂の頭から抜けてしまっていたのだった。

終業時刻間際、突然、惣が立ち上がりぱんと手を叩いた。
「全員、ちょっと聞いてくれるか」
開発事業本部のフロアにいる社員が手を止めて、前にいる惣に視線を送る。すると、隣の席に座る奈々が「重大発表ですよ」と声を潜めて言った。
(そういえば重大発表があるって言ってたっけ？　なんだろう？)
奈々は、なぜか志穂に向かって勝ち誇ったように口角を上げた。彼女の表情の意味がわからず首を傾げながらも、志穂はほかの同僚に倣い、身体ごと前へ向けた。

前に立った惣は、全員を見回し志穂で視線を止めると、なぜか案じるような目を向けてくる。
まさか、志穂が担当しているプロジェクトに追加の指示でも出たのだろうか、と考えるが、それならばチーム内で共有すればいい話である。
(なに？)
惣から見つめられるなんて滅多にない出来事に動揺し志穂が目を逸らすと、彼も別の方向に目を向けて誰かに合図をするように小さく頷いた。
すると、斜め向かいに座っている隆史が立ち上がり前に向かうと、なぜか惣の右隣に並んだ。そして奈々もそのあとに続き、隆史の隣に立つ。
(隆史さん……と、上園さん？　異動かな？　隆史さんからはなにも聞いてないけど)
志穂は、惣の隣に立つ隆史と奈々に目を向けた。
(でも、二人同時なんて珍しいし、この時期に？)
疑問を持ったのは志穂だけではないようで、皆、様々な憶測をひそひそと口にした。中には、結婚報告じゃないか、という声もあり、まさかと思いつつもいやな予感が胸を突く。
「えぇと、私事ではありますが……実は、この度、上園さんと結婚することになりました。彼女は妊娠中のため、仕事に影響が出る可能性もありますが、協力していただけると助かります」
隆史が言うと、奈々は頬を赤らめながら、会釈をした。そして隆史と顔を見合わせて、微笑み合う。まるでずいぶんと昔から関係があったような親密さだ。
(え……結婚って、隆史さんと上園さんが……？　妊娠って……なんで)

志穂は信じがたい思いで前に立つ二人を凝視した。
すると、隆史と目が合い、気まずそうに逸らされる。
どうして自分の恋人が、ほかの女性を結婚相手だと言って紹介しているのだろう。
志穂には、なにがなんだかわからなかった。
「うそ～いつから付き合ってたの⁉」
どこからか冷やかしの声が飛ぶ。
「えぇっと……たしか、半年くらい、か」
隆史は冷やかしに照れた様子で頭を掻きながら答えた。時々、隣に立つ奈々に視線を向ける様子は、二人が相思相愛であることを印象づけた。
半年の交際期間。それが本当かどうかはわからないが、ちょうど奈々が新しい恋人の話を始めた時期と一致する。志穂はずっと、隆史との交際の話を奈々から聞かされていたのか。自分の中にあった隆史への信頼が、砂で作った城のようにさらさらと崩れ落ちていった。
「なんだよ、全然気づかなかった！」
「うそだろ～奈々ちゃん、マジ⁉」
同僚数人がはやし立てる。周囲が祝福の雰囲気に包まれ、どこからともなく「おめでとう」「お幸せに」という言葉が飛び交った。
（先週だって……普通に家に来てたじゃない……）
別れ話なんてされなかった。隆史は「じゃあ、また」そう言って帰っていったのだ。奈々と浮気し、さらに結婚すると決まっていたのに、自分とも関係を持ったということではないか。
「お前ら……冷やかしはその辺にしとけ。上園からもなにかあるか？」
惣が奈々に話を向けた。
志穂は耳を塞ぎたい思いに駆られながらも、隆史と奈々に厳しい視線を送る。こんなときばかりは、あまり変わらない自分の表情に感謝した。
「あ、はい！　これから病院でお休みをいただくことも多くなり、ＵＩデザイナーの先輩でもある小島さんには特にご迷惑をおかけしてしまうと思いますが、フォローしてくださると嬉しいです。仕事は続けたいので、これからも厳しくご指導、よろしくお願いします」
奈々が軽く頭を下げながら志穂に目を向けて言った。
彼女の勝ち誇ったような顔を思い出す。もしかしたら彼女は、志穂の恋人だと承知の上で、隆史を奪ったのではないか。だからあえて、恋人の話を志穂に聞かせていたのではないだろうか。
（どうしてわざわざそんなこと。選ばれたのは自分だって、見せつけたかったの？）
彼女が言っていた重大発表とはこのことだったのだ。
隆史にしても奈々にしても、志穂を裏切っておいてどうしてあれほど堂々とした顔ができるのか、志穂にはなにもかもが信じられなかった。
（もしかしたら、最初から私は、遊び相手でしかなかったのかもしれない。本命ができたから、捨てられただけ）
それに気づかず、そのうち結婚しよう、なんて上辺だけの彼の言葉を信じていた自分が間抜け

だったのである。
誕生日やイベントには欠かさずレストランを予約する大事な相手である奈々と、空いた時間にだけ会う相手である自分。初めから彼は、志穂と結婚するつもりなどなかったのだろう。
デートはいつも志穂の家で、一度だって有名なフランス料理店に連れていってもらったことはない。デートの約束をしていても、彼の気分で破られることも多かった。
（そういうところが楽だって思ってたけど……本命には、違ったってことだよね）
彼にとって志穂は、別れの言葉さえ言わず、なかったことにしてしまえる程度の存在だったのだろう。
「上園は、産休までは引き続き開発事業本部の仕事を続けます。みなさんにもご迷惑をおかけすると思いますが、ご容赦ください」
隆史がそう言って頭を下げると、温かい拍手が送られた。
（産休っていつ？　これから毎日、隆史さんと上園さんと顔を合わせなきゃいけないの？　同じプロジェクトを担当してるのに？）
どんな顔をして彼らと話せばいいのだろう。おめでとう、なんて声をかけたくもない。
私が辞めれば――そんな思いが頭を掠めるが、小さく首を横に振る。
（プロジェクトは動き出したばかりなのに……今、辞めたら、周りに迷惑をかけちゃう）
現在受け持っている仕事を途中で投げ出し、すぐに退職はできない。
それに、ＵＩデザイナーとして同じ仕事をしている奈々の分の負担が増えるのは間違いない。

（毎日、この二人と仕事しなきゃならないなんて）
絶望感に志穂の身体がふらりと揺れた。デスクに手を突き、深く息を吐く。下を向いていると、惨めさに涙が溢れてきた。騙されていた悔しさと、気づけなかった恥ずかしさで胸をかきむしりたくなる。
ただ、一連の衝撃のせいか、隆史への好意が一瞬で消え失せたことだけは、不幸中の幸いかもしれないが。
和気あいあいと隆史と奈々の出会いを聞く同僚たちをよそに、ただ一人傷口を抉られたような痛みに顔を顰める。それを奈々が嘲笑っているような気がして、さらに唇を噛みしめた。
そんな自分を心配そうに見つめる人がいることには、気づかなかった。

席に戻ってきた奈々は、志穂をちらりと見つめて、いたずらっぽい笑みを浮かべた。まるでドッキリが成功したかのような顔をしている。
「驚きました？」
奈々に聞かれて、志穂は自分を落ち着かせるように深く息を吐いた。
「……うん、驚いた。あの、体調は……平気？」
志穂が聞くと、奈々は驚いたように目を丸くして、頬を引き攣らせた。
感情的には彼女を罵りたい気持ちもあったが、妊婦を怒鳴りつけるわけにもいかないし、奈々を責めたところで、彼女の妊娠がなくなるわけでも、隆史の浮気の事実が消えるわけでもない。

傷ついていても、泣きたいくらい辛くても、顔に出さず取り繕うのは昔から得意だ。それが冷めていると言われる所以なのだろうが、今日ばかりはそれがありがたかった。
「え、あ、はい。今は平気ですけど、それだけですか？」
「それだけって？」
「……いえ、なんでもないです。すみません……私、今日はもう帰りますね」
「もう帰るって……それ、間に合う？」
やりかけの仕事を指して言うが、奈々はきょとんとした顔のまま「たぶん」と言った。
「今日は井出さんの両親と結婚前の顔合わせがあるんです。だから行かなきゃ。井出さんのお父さん気が早くて、赤ちゃんの服とか買おうとするんですよ」
奈々は帰り支度をしながら、そう話した。
「わかった。じゃあ、残りは私がやっておくから」
「そうですか？　じゃあお願いしまーす」
隆史との関係を志穂に聞かせどうしたいのだろうか。自分たちは結婚する、だからあなたの出る幕はない、と伝えたいのかもしれない。そもそも志穂は彼の本命でもなかったというのに。
「お疲れ様」
志穂が淡々と返すと、奈々はなぜか腹立たしそうな顔をする。
幸せいっぱいのはずの彼女がそんな顔をする理由がわからず、けれど、その理由を知りたいとも思えず、志穂はパソコンに向き直った。

「井出さん、まだかかりますか？」
「あ～悪い。遅れるって俺から親に言っておくから、駅で待っててくれるか？」
「わかりました～お先に失礼します」
奈々もやり残した仕事があるのだが、残業してまで進めるつもりはないらしい。頼むくらいなら自分がやればいいかと、志穂は彼らの話を聞きながら手を動かした。
奈々がフロアを出ていったのを横目に見ながら、志穂はふっと息をつく。隆史の浮気相手の隣にいて気が休まるはずもなかった。
「志穂さん、大丈夫っすか？」
向かいに座った松浦が聞いてくる。
「なにが？」
「いえ……なんでもないっす」
松浦は、気まずそうに視線を落として首を振った。
（もしかして、顔に出てたかな）
志穂は両手で頬を包み、ぱちぱちと叩いた。
凝り固まった肩を解していると空腹感を覚える。
（お腹空いたかも。今日は仕事が進みそうにもないけど……終わるまでは帰れないし）
急ぎの案件を抱えていないエンジニアは、皆、定時で帰っていった。帰れるときは早く帰る、がこの会社のスタンスだ。残っている人は数人で、今、盛大に腹が鳴ったらとても響くだろうと思い、

席を立つ。
（お腹に溜まるものでも飲もう。自販機にポタージュあったよね）
志穂はフロアを出て休憩室に向かう。休憩室の廊下には自販機が並んでおり、室内はさほど広くはなく、三名も入ればいっぱいだ。百円玉を取り出し自販機に入れようとして手を止めた。
ちょうど休憩を取っていたと思われる女性数人がいるらしく、中から声が聞こえてきたのだ。その中の一人の声に聞き覚えがあり、ドアに近づいた。
「違うよ、それ誤解」
聞こえてきたのは、帰ったはずの奈々の声だ。
（駅に向かうんじゃなかったの？）
志穂は開けっぱなしになっているドアのすぐ横に身を隠した。とはいえ、廊下からは丸見えで、誰かが来ればなにをしているのかと思われそうだが。
「そうなの？　小島さん、二年くらい前から井出さんと付き合ってたって噂があったけど」
「違うってば。私、井出さんにちゃんと聞いたもん。あの人、ずっと井出さんに付き纏ってたの。告白を断ったら、ストーカーするようになって、彼女面されたんだって。小島さんしつこくて、このままじゃなにをされるかわからないから、話を合わせてたみたいだよ」
志穂について、隆史は奈々にそう説明していたのか。
違う、と叫びたいのに、足がその場に縫いつけられてしまったかのように動かなかった。
「え～そんなことするかな。いい人だと思ってたけど」

「いい人だなんてとんでもないよ！　付き合ってもいないのに、結婚を匂わせてくるんだよ。怖くない？」
「うそでしょ！　こわっ！　ガチのストーカーじゃん」
「そうだよ、そう言ってるでしょ。だから私、井出さんと付き合ってから、彼とのデートの話をあの人に聞かせてたの。逆上されても怖いから、さりげなくだよ。ほら、ストーカーってやってる方はストーキングだって気づいてないって言うじゃん。それで自分が恋人じゃないって気づくかなと思ったんだけど、全然みたい。ほんと怖いし、会社辞めてくれないかな」
「井出さんと奈々ちゃんが結婚するって知って、なにかしてくるかもよ。大丈夫？」
「あの人、会社ではまともなふりしてるし、めちゃくちゃいい人ぶってるから平気だと思う。でも、行き帰りは心配だから、なるべく彼に送ってもらう」
「うん、そうした方がいいよ。え～でも怖いね。警察に相談してみたら？」
「私もそう言ったんだけど、男がストーキングされてるなんて恥ずかしくて言えないって」
奈々のため息が廊下にまで聞こえる。
「あ～それもそっか。男の人ってそういうの気にするもんね」
たしかに、いつか結婚できたら……なんて話が会話の中で出たことはあった。けれど、それを言い出したのは隆史だ。志穂はそうだねと返したにすぎない。
（隆史さんにとって、私は……邪魔なんだ）
会社に親しい同僚がいない志穂は、交際の件を誰にも話していない。それでも、万が一バレたと

きのために予防線を張っておいたのだろう。
この場に踏み込んで、志穂が違うと言ったところで、奈々は信じないだろう。それに、隆史とのメッセージのやりとりを思い出すと、最初からそのつもりだったと思わざるを得なかった。交際の証拠になるようなメッセージはいっさいない。
自分に告白してきたのも、体のいい遊び相手になると思ったからか。騙されていたことに気づかず、バレても黙って耐えるような相手だから。
元恋人と浮気相手が幸せそうにするのを見せつけられて、さらにストーカーだと濡れ衣を着せられて、これからもそれに耐え続けなければならないのか。
（……やっぱり、辞めよう）
プロジェクトがすでに進行中であることを考えると、後ろめたさに苛まれる。
奈々一人でこなせる仕事ではないし、在宅のデザイナーに頼むことになるだろうから、スケジュールが押すことは確実だ。けれど、これ以上彼らと一緒に働きたくない。
（惣にも、迷惑かけちゃうのは……申し訳ないけど）
プロジェクトが遅れ謝罪に向かうのは、リーダーである隆史だけでなく、惣もだ。
言いようのない悔しさで、息が詰まる。喉がひくりと鳴り、涙が滲んだ。自分がなにをしたと叫び出したい衝動に駆られながらも、胸元をぎゅっと押さえる。
「……っ」
泣き声を上げないように、唇を噛み締めた。ぎりぎりと胃を絞られるような痛みの中、逃げるように踵を返す。
すると目の前が急に陰り、誰かの手が肩に触れた。驚いて顔を上げると、大きな体躯が志穂を隠すようにドアの前に立つ。
「社員の根拠のない噂を広めるのは感心しないな」
「み、宮川取締役！」
休憩室にいた女性社員が色めき立った。奈々もまた声を上げるが、先ほどとは打って変わった甘ったるい声が聞こえてくる。
「根拠はありますよ？　あの人が井出さんにストーカーしてたのは本当ですもん」
「あり得ない」
「あり得ないって……なんでですか」
惣は、ふてくされたように言う奈々を鼻で笑い、信じがたいことを口にした。
「同じ部内だから秘密にしていたが、志穂が付き合ってるのは俺だからな。そんな彼女が井出をストーカーするわけがないだろう」
「えっ……うそっ」
女性たちの甲高い声が響く。
志穂もまた、ドアの横に隠れながら涙が引っ込むほどに驚いた。
名前を呼ばれたことも、付き合っているというそも。先ほどまでの悔しさや悲しみすら吹っ飛ぶくらいの衝撃である。

（付き合ってるって……なに言ってるの!?）
庇ってくれたのだろう。それは理解している。
だが、いくらなんでもそんなうそが通用するはずがない。彼がこの会社に来て九ヶ月弱。惣とはプライベートでの関わりなどまったくないのだから。
案の定、奈々は耳を疑った様子で惣に食ってかかる。
「そんなわけないです！　だってメッセージ見ましたもん！」
「メッセージって？」
「何時に家に来るのかとか、クリスマスはどうするのかとか。あの人、何度も井出さんにメッセージを入れてたんですよ！　井出さんは全部スルーして相手にしてませんでしたけど」
それは、メッセージの返信はいつも電話だったからだ。志穂は話すことが苦手で文章のやりとりを選んでしまうが、隆史はほとんど電話だった。メッセージ画面から通話の履歴を消したのだろう。その理由も今ならわかる。
「そのメッセージに、志穂が井出を好きだって証拠でもあったのか？」
隆史がメッセージでのやりとりを好まないため、志穂も用件しか入れていない。恋人だったはずなのに、甘ったるいやりとりは欠片もなかったと言い切れる。
約束した日はどうするのか、何時に来るのか、など。思い返してみると、交際していたとは思えないほど淡々としたメッセージばかりだ。
「それは……でも、信じられません！　取締役と小島さんが付き合ってるなんて、そんな雰囲気全

然なかったじゃないですか！　ね、そう思わない？」
奈々は勢いのままほかの女性に同意を求めた。
「いや、そんなの知らないよ。私、奈々ちゃんと井出さんが付き合ってたことも気づかなかったし」
困ったように女性が言った。
さすがに惣の前で、志穂の悪口を言う気にはならなかったのかもしれない。
風向きが変わってきたことに、志穂の胸はやかましく音を立てる。これまで仕事の話しかしてこなかったのに、志穂がストーカーをしていないと惣が信じてくれたことに驚いた。
（どうして、私を信じてくれるの？）
隆史の悪意ある裏切りで荒んだ心が、すくい上げられていくようだった。
志穂は、壁にもたれかかり、目頭に浮かんだ涙を指で拭った。
「じゃあ、二人で撮った写真とか見せてくださいよ。あるなら、信じますけど」
どうせないだろう、とばかりに奈々は言った。
奈々と一緒にいる女性たちはすっかり萎縮しているというのに、取締役相手に勝ち気な態度を崩さない奈々をある意味尊敬してしまう。
「あるぞ。って言っても、昔のだけどな」
志穂の心配を余所に、惣は堂々とした口調で返した。
昔のだけど、という彼の言葉に鼓動が跳ねる。

（まさか、私のこと、覚えてたの？）
「昔って……どういう意味ですか？」
「志穂は俺の大学時代の恋人だ。再会愛ってやつだ、ほら」
「うそ……これ。っていうか、今どきロック画面を恋人の写真にします？」
志穂は惣の話をにわかには信じられない思いで聞いていた。スマートフォンのロック画面に自分と惣が映った画像が使われているなんて、準備がよすぎやしないかと。
「うるさいな、ほっとけ」
照れたような惣の声が聞こえる。
（それじゃ、本当に私を好きみたいだよ）
聡明な彼のことだから、昔の写真を急いで壁紙にしてくれただけだとわかっているのに、くすぐったいような思いがしてくる。
「うわ、ほんとだ。取締役、若～い。小島さんもめちゃくちゃ可愛い」
惣が見せたであろう写真には覚えがある。自分のフォルダにも同じ写真があり、当時はそれを何度も見返していた。
付き合った期間はたったの一ヶ月。二人で撮った写真はそれ一枚だけだ。
「ほかのはないんですか？　見た～い」
「見せるわけがないだろ。上園が信じられないって言うから見せてるだけで、志穂の許可は取ってないんだから」

志穂、とふたたび呼ばれて、人知れず頬が熱くなる。
惣が自分を呼ぶ声はいつだって甘かった。名前を呼ばれるたびに胸を弾ませていた過去を思い出すと、初めて彼に抱かれたときのことまで脳裏に浮かんでくる。
「それより今、小島は上園がやり残した分の仕事をしている、それを理解しているか？」
「え……」
「井出の親と食事の予定があるんじゃなかったか？　こんなくだらないことに時間を使う暇があるなら、戻って仕事をしてくれ」
惣のやや低い声が響いた。
叱責（しっせき）しているわけではないが、奈々には十分効果があったようだ。
「……すみません、でした。井出さんを待ってる間、ちょっと話してただけなんです」
小さな謝罪が聞こえて、慌てたように女性たちが続けた。
「ごめん、奈々ちゃん、また今度ね。私、仕事に戻らなきゃ！　取締役、私たちもこれで！」
「私も！　お疲れ～。失礼しました！」
女性二人が休憩室から出てくる。ドアの横に立っていた志穂に気づき、ぎょっとしたように身体を震わせ、ばつが悪そうに目を逸らすとばたばたと走っていった。
あの女性たちは、嬉々として惣と自分の交際について広めるだろう。
（どうしよう……本当のことを話した方がいい？）
一番いいのは、ストーカーの話も含めて、志穂がなにもかもを正直に話すことだ。

けれど、隆史と交際していたことを公にすれば、当然、奈々もそれを知ることになる。隆史がどうなろうと自業自得だと思うが、妊娠している奈々を追い詰めるような真似はしたくなかった。

志穂はポタージュを買うのを諦め、席に戻った。頭の中ではどうにか解決策を探ろうとしているが、退職以外なにも思いつかない。

惣を問い詰めたいのに、オフィスで話をするわけにもいかないし、目の前には大量の仕事。先ほど休憩室の前を通りかかったのはどこかに行く途中だったのか、彼は席にいなかった。

なんとか目の前の仕事を熟しながら、惣が席に戻るのを待つ。

それから一時間ほど経った頃。

志穂が仕事を終えて、帰り支度をしていると、どこかに行っていた惣がようやく戻ってきた。

目が合うと、惣はなにかを企むように微笑み、分厚い書類を手に志穂の席に近づいてくる。

もしかして話しかけられるのだろうかとつい身構えてしまうが、手が軽くデスクに置かれただけですぐに離れていった。

惣は志穂の後ろを通り過ぎ、手に持った書類をシュレッダーにかけ始める。

（なんだ……シュレッダーしに来ただけ……）

ざりざりと紙を呑み込む機械音を聞きながら、強張った肩から力を抜いた。するとデスクに小さな付箋が貼りついていることに気づく。

（これ……電話番号？）

付箋に書かれた十一桁の番号にメールアドレス。それにメッセージアプリのＩＤ。なにも書かれ

ていないけれど、あとで連絡しろ、ということだろう。

（惣に、迷惑をかけるわけにはいかない……自分でなんとかするって話さないと）

志穂は周囲に挨拶をしてフロアを出て、エレベーターで一階まで下りた。

仕事中の彼に連絡をするのは迷惑かもしれない。家に帰ってから連絡するべきだろうか。

迷った末に、志穂は駅に向かう途中で足を止めて、メモに書かれた番号に連絡を入れた。

（もし仕事中だったらかけ直そう）

コール音を聞いて待つと、相手はすぐに電話に出た。

『志穂か？　早かったな。今どこだ？』

電話でも名前を呼ばれて、昔を思わせるやりとりに困惑する。

「会社を出て、駅に向かってます。まだ仕事中、でしたか？」

彼の口調に迷惑そうな雰囲気がなくてほっとする。

『いや、大丈夫だ。まだ近くにいるよな？』

「はい」

『なら南口にあるホテルの三階で待ってろ。鉄板焼きの店があるから、そこの前な』

「え……あ、切れてる」

ぷつりと電話が切られ、耳からスマートフォンを離す。手のひらにじっとりと汗をかいていることに気づき、ハンカチで拭った。

惣と久しぶりに電話で話すことに緊張していたらしい。会社で毎日顔を合わせているし、上司と

部下として接することにも慣れたと思っていたのに。
（惣は、どうして私を庇って、恋人だなんて言ったんだろう）
いや、そもそも隆史の浮気がわかったときに問い詰めていれば、惣にうそをつかせることもなかった。
そんな後悔ばかりが押し寄せてくる。
（意気地なし……私は、昔からなにも変わってない）
待ち合わせ場所に向かいながら歩いていると、バッグに入れたスマートフォンが振動する。
画面には〝実家〟と出ていた。用件はわかっている。
（年末に帰ってきなさいって、言われるんだろうな。果穂はきっと家にいるよね……）
出ようかどうしようか迷い、足を止めることなく通話を押した。
「はい」
『志穂？』
「お母さん、どうしたの？」
『どうしたのって、全然連絡をよこさない娘に電話をしただけよ。ところで、年末は帰ってこないの？　果穂も会いたがってるわよ？』
「ごめん、いろいろと忙しくて。そのうち有休取って顔出すよ」
そんなうそをつくのにも慣れたものだ。実家は神奈川県で、アパートから一時間半の距離だ。いつでも帰れるが、いまだに足は遠のいている。

『こっちに来るのが面倒なのはわかるけど、もう少し顔を出しなさい。志穂はおとなしいから、周りの人と上手くやれてるのかって心配なのよ。ほら……最近、残業が多くて過労死したってニュースがあったじゃない。あなたはそういうの上手く断れなそうだし……』
「残業はそこまで多くないから大丈夫。周りの人とも上手くやってるよ」
早く電話を切りたい思いに駆られて、早口で言った。
両親には愛情を持って育ててもらったと思う。ただ、果穂と自分には明確な差があった。
自己主張が苦手で人付き合いもままならず、一人でばかりいる志穂を両親はことさら心配していた。
果穂みたいにもっと前に出なさい。果穂みたいにはっきりと話しなさい。果穂みたいに友達をたくさん作りなさい……果穂みたいに、それが両親の口癖だった。
それは決して悪意ではなかったと、今ならわかる。
けれど、幼い志穂にとって、果穂に比べて自分は劣っているのだと胸に刻まれるには十分だった。
それに、あれから九年近く経ち、自分の中で惣のことが過去になっても、果穂とは距離ができてしまったままだ。一度作ってしまった壁を壊すのは簡単ではなく、なにもなかったように接するのは難しい。
『一日くらい帰ってこられないの？』
「果穂が家にいるんだから、いいじゃない」
『果穂は果穂よ』

母にきっぱりと言い切られて苦笑が漏れた。
「ごめん、予定があるから。そのうち休みに顔を出すよ」
『わかったわよ。でも、ちょっとでも時間があるならこっちに来るのよ』
「今忙しいの、悪いけどもう切るね」
志穂はおざなりに返事をして電話を切り、待ち合わせ場所のホテルへと急いだ。

惣と待ち合わせているラグジュアリーホテルは、駅の南口から直結しており、利便性のいい立地に建っている。
客室からは周囲に聳え立つ高層ビル群を一望でき、さらに世界水準のサービスを受けられるとあって、外国人観光客やビジネス客の利用も多く、結婚式場としての人気も非常に高い。
まさか高級ホテルに呼び出されるとは思ってもみなかった志穂は、自分の格好に目を走らせて、ため息を漏らす。
白のブラウスに長めのプリーツスカート。その上から、ムートンジャケットを羽織っている。仕事着としてはおかしくないが、レストランフロアでの場違い感に落ち着かない。
志穂はジャケットを脱ぎ、腕にかけると惣の到着を待った。
「待たせたな」
惣が来たのは、志穂が着いてから十分後だった。
電話のあと、すぐに向かってくれたのかもしれない。

「いえ、私こそすみません。お忙しいのに、電話を……」
「その話し方慣れないんだよな」
ため息まじりに言われて、下げかけていた頭を上げた。
「え？」
「とりあえず入るぞ」
腕を引かれて、店に足を踏み入れた。
店内は和の雰囲気が漂い、大きなガラス窓から眼下に広がる日本庭園を見下ろせる造りになっている。中央には大きな鉄板とカウンター席があり、景色を見ながらシェフが銘柄牛や海鮮を目の前で焼いてくれるようだ。
惣はカウンターではなく半個室席を選んだ。席に着き、メニューを見ることもなくスタッフを呼ぶと、おすすめコースを頼んだ。
「たしか肉は好きだったよな？　飲み物はどうする？」
「はい……えっと、ウーロン茶で」
待ち合わせ場所に飲食店前を指定された時点で予測はできていたが、まさか本格的なコース料理の店とは思ってもみなかった。
「じゃあ、ボトルシャンパンとウーロン茶。グラスは二つで」
しかも頼んだのはボトル。食事が終わるまでに二時間はかかるはずだ。自分のためにわざわざそんなに時間を取る必要はなかったのに。

「かしこまりました」
店員が一礼して背を向ける。
黙ったまま飲み物が運ばれてくるのを待っていると、惣がこちらを見て小さく笑った。
「困った顔をしてるな」
「それは……だって、取締役があんなことを言うなんて、思ってなかったので」
志穂の言葉に、向かいに座った惣が眉を上げて嘆息した。
「なぁ、それ、やめないか？　無理強いはしないが、もう少し砕けてくれ。昔は、惣って呼んでただろう？」
にっこりと微笑まれ、顔が引き攣った。
冗談を言っている様子はない。昔のよしみで無礼講でいい、という意味だろうか。
「今さら、呼べるわけないですよ」
「それは残念」
さして残念そうでもなく彼は言った。
こんな話をしに来たわけではないのだ。なぜ彼がうそをついてまで自分を庇ってくれたのかはわからないが、上司を面倒事に巻き込むわけにはいかない。
「あの、私……」
「辞めるなよ？　マナビゼミナールのプロジェクトメンバーから、デザイナーの主力であるお前を外すことはできない。今後のチームについては配慮する。だから……簡単に諦めるな」

退職する、と口に出すのを遮るように惣が言った。
懐かしいセリフに驚いた。出会った頃、サークルの空気が肌に合わず辞めようとしていた志穂に、彼は今と同じように「辞めるな」と言ったのだ。
楽しいことを、俺がたくさん教えてやるから――そう言って、志穂をいろいろなところに連れ出してくれた。
（ほんと、変わってないな）
志穂がなにを言うのかわかっていたのか、そんな風に先手を打たれてしまうと「これ以上迷惑をかけたくないから辞める」とは言いにくい。
「……相変わらずですね」
昔話をするつもりはなかったのに、気づくとそう口にしていた。
学生時代となんら変わっていない。お人好しなところも、困っている人を放っておけないところも、人たらしなところも。彼は人付き合いのできない志穂に、遊ぶ楽しさを教え、恋愛の素晴らしさを教えた人だ。
「そうそう性格なんて変わらないだろ。お前だって昔と変わってない」
惣は懐かしそうに目を細めた。
「……私のこと、覚えてたんですね」
会社で初めて顔を合わせたときから今まで、過去について話題に上ったことは一度もない。だからさっき、学生時代の話を持ち出されて心底驚いた。写真までまだ持っているなんて思ってもみな

かった。
「当たり前だろ。たとえ一ヶ月でも、恋人だった女の顔くらい覚えてるさ」
惣はさも当然だとばかりに頷いた。
覚えていたならどうしてなにも言わなかったのだろうと思わなくもないが、言わなかったのは志穂も同じだ。でも志穂も、惣を忘れたことはなかった。恋する気持ちが形を変えても、自分に恋愛を教えてくれた人のことを忘れはしない。
けれど、あれはもう過去だ。今から惣となにかが始まるわけもないのだから、言う必要はないと思っていた。
「そうでしたか」
「俺も、忘れられてると思ってた。お前こそ、覚えてたんだな」
忘れるわけがない、そう言おうとして志穂は口を噤んだ。
過去であっても、それを口に出すのはなんだか悔しかった。
志穂が別れのメッセージを送り連絡を絶ったあと、彼とは一度も顔を合わせていない。志穂の家を彼は知っていたし、連絡を取ろうと思えば取れたはずだ。
それでも、惣からはなんの連絡もなかった。一方的に別れを告げたのは自分だが、やはり彼にとって自分は賭けの対象でしかなかったのだと思い知らされた。
「覚えてますよ。記憶力はいい方ですから。あの、さっきはありがとうございました。ストーカーと思われるのは心外でしたから、助けてくれたことには感謝しています。でも、これ以上取締役に迷惑をかけるつもりはありません」
「迷惑だなんて思ってない。やりたくてやったことだ」
惣はあっさりとそう言った。志穂の恋人に思われるなんて、彼にとっては迷惑だろうに。
（私を庇うために、恋人だってうそをつかせるなんて。そんなことさせるくらいなら、退職した方がマシだよ）
志穂が退職すれば万事解決するのだ。
隆史のストーカーと思われたところで、社員と顔を合わせなければ痛くも痒くもない。それに、志穂がストーカーでないことを知っている隆史が、警察に行くことは絶対にない。
退職日までは針のむしろだろうし、引き継ぎで迷惑をかけてしまうかもしれないが、自分のほかにもデザイナーはいる。それに、同じプロジェクトを担当しているメンバーが三角関係になっているより、はるかにいいはずだ。
「私事に取締役を巻き込むつもりはありません。私が仕事を辞めればそれで済みます」
「さっきも言っただろ。自分が悪くないのに辞めるな。それとも、お前は本当にストーカーをしてたのか？」
「まさかっ！」
「だろうな。お前と井出は付き合ってた、でいいんだよな。まず、そこからちゃんと説明しろ」
だが、説明したら巻き込んでしまう。けれど、黙っていることもできず、志穂は渋々頷いた。
「……はい」

「お待たせいたしました」
そのとき、タイミングを計ったようにグラスを持った店員が来た。
シャンパングラスに酒を注がれるのを見ながら、どこから話そうかと頭の中を整理する。
「飲めなかったら、グラスは置いておけばいい」
「大丈夫です……飲めます。いただきます」
グラスを持ち上げて、口をつける。爽やかな香りが鼻から広がり、甘さはあるがすっきりとした口当たりで飲みやすい。銘柄はわからないが、肉料理にも合いそうだ。
ドリンクを運んだスタッフとは別のスタッフがすぐにやってきて、綺麗に盛りつけられた前菜が目の前に置かれた。志穂はナイフとフォークを手にしながら、口を開いた。
「たか……井出さんとは、二年前から付き合っていました。彼がメッセージより電話が好きだと言っていたので、証拠になるようなものはないですが……私の勘違いではありません。上園さんと井出さんが付き合っていたなんて、今日まで知りませんでした」
家に行く、という隆史からの電話を、いつも待つばかりだった。冷静に考えれば、本命とは思われていないと気づけたはずなのに。
「勘違いなんて初めから思ってねぇよ」
「私たちが付き合ってたことに、気づいてましたか？」
「あぁ、なんとなくな。だから井出から結婚の報告を受けたとき、気になった」
やはり案じてくれていたのだと知り、志穂は小さく礼を言った。

「ひどいことをするな」
隆史と奈々の結婚報告は、ただただショックだった。
しかし、彼に対する好意が失せた今は、無力感が大きい。大切にされていないと気づきながらも、楽だからと見て見ぬふりをして、隆史の本質に気づけなかった。
「二人を祝えないにしても、心変わりは仕方ないから納得しようとしたんです。でも、ストーカーなんて話を聞いたあとじゃ、一緒に仕事をすることはできません。井出さんも上園さんも、私が退職すればいいと思ってるんです。その通りにするのは癪ですが、それが一番いいと思っています」
「そうやってまた、俺のときみたいに逃げるのか？」
冷ややかな口調で言われた言葉に、志穂は胸の内を見透かされたような思いでびくりと肩を震わせた。メッセージ一つで別れを告げたときのことを揶揄されたのだと、気づかないわけがなかった。
「それ、は……」
志穂が告白をＯＫするか友人と賭けていたと果穂から聞いたから。そんな理由は言い訳にもならない。本当はあれから何度も後悔した。あのときどうして直接確かめなかったのかと。
それができなかったのは、惣が自分を選んでくれるとは思えなかったからだ。彼の口から、果穂との交際を聞かされたくなかった。だから、自分から別れを告げて、惣を諦めた。
あのときの自分の気持ちをわかってもらえるとは思えず、志穂は口ごもった。視線を落としてテーブルを見つめていると、向かいからため息が聞こえてくる。
「果穂からなにか言われたんだろ？」

「どうして、それを」
まさか惣が知っていたとは思わず、驚いて顔を上げた。
「俺もいろいろ吹き込まれたからな。その件で志穂と話そうと思っていた矢先に、お前から別れのメッセージが届いたんだ。そのあとはブロックされたしな」
果穂ならばそれくらいやりそうだ、と妙に納得してしまった。
九年も前のことだが、今さら自分の行動の愚かさを突きつけられた気分だった。
「果穂は……なにを？」
「身体の相性が悪いから別れたい、志穂がそう言っていたと聞かされた」
「そんなことあるわけないっ！」
志穂は頬を真っ赤に染めながら必死に首を横に振った。
たった一度だけ惣と身体を重ねた日を思い出す。志穂はあのとき初めてだったし、それで身体の相性などわかるはずもない。
（あのとき、別れ話をする前に惣に確認していれば……）
惣は自分を信じてくれていたのに、彼を信じられなかった。自分が恥ずかしくてならない。
「果穂は……あなたが私と付き合うことを、友人との賭けの対象にしていたと言いました」
惣は、志穂の言葉に呆れたように肩を竦めた。
「それこそまさかだな。あのとき俺は、間違いなくお前が好きだった。好きだと言ったのはうそじゃないし、賭けなんてするわけがない」

「そうだったんですね」
笑おうとしても、上手く笑えなかった。
今さら過去の誤解が解けたところで、時間は元には戻らない。彼の手を離してしまった自己嫌悪が残るくらいだ。
「それで、やっぱり逃げるのか？」
「……はい、辞めます」
志穂がきっぱり言うと、向かいからふたたび嘆息が聞こえる。
「お前は、そうやって自分ばかりが泥を被ろうとするのをいい加減にやめろ。俺を利用してあいつらを見返してやるくらいの気概を持て。もっと強かになれよ。見ているこっちがもどかしくなる」
惣は眉を顰め、苛立った口調で言った。
「見返す……？」
思ってもみなかったことを言われて、志穂は目を見開いた。見返すために惣を利用するなんてできるわけがない。
惣は苦笑しながら腕を伸ばし、戸惑う志穂の頭の上にぽんと手を置き、呆れた顔をした。
「辞める決意をするのは、恋人として俺を利用してからにしろ。悪いようにはしない」
「どうしてそこまで……」
昔付き合っていたとはいえ、たった一ヶ月。それにいい別れ方をしたとは言えないのに。
「お前ほど、俺は諦めがよくないもんでな」

諦め、の意味はわからないが、もしかしたら彼は、上司として気にかけてくれているのかもしれない。

「ご厚意はありがたいですし、心配してくださるのも、嬉しいです。でも、恋人のふりをしても取締役にはなんのメリットもありません。それに、あなたの恋人に迷惑がかかります」

「俺に恋人はいない。志穂の恋人になるのになんの障害もないぞ。喜んで利用されてやるよ」

彼の言葉に益々戸惑ってしまう。

惣がどうして自分にここまでしてくれるのかはわからないが、守ろうとしてくれているのだけは伝わってきた。

（そういえば……昔から、困ってる人を放っておけない人だったもんね）

『周りにいいように使われてるなよ』

かつて、サークルの集まりのバーベキューで、一人ぽつんと料理の下拵えをしていた志穂を見かねたのか、惣がそう言って声をかけてきた。

『辞めるなよ。また来い。楽しいことを、俺がたくさん教えてやるから』

まったくもって上からなセリフだったが、不思議と苛立ちはしなかった。社交辞令だと思ったのに、その後も、度々彼に話しかけられるようになるとは夢にも思わなかった。

（昔も今も……変わらないな）

辞めるな、喜んで利用されてやる、なんて、本心なはずがないのに。昔みたいに流されるまま彼の優しさに甘えてしまいたくなる。

「ストーカーなんて話がなくなれば、お前も仕事がやりやすくなるだろう。俺は優秀な社員を失わずに済む。いいことずくめだ」

その言葉で、ようやく腑に落ちる。やはり彼は上司としてチームの心配をしているだけなのだ。このまま志穂が退職すれば、プロジェクトの進行にも影響があるかもしれない。

「そのために、私の恋人になると？」

いくら困っている人を放っておけないとしても、自己犠牲がすぎる。彼がそこまでするメリットなんてなにもない。

「あぁ。過去の誤解は解けたし、俺は今フリーだし、お前は女として魅力的だからな。なんの問題もない」

惣は色気を含んだ目をして志穂を見つめた。

「女としてって……」

暗に身体の関係を求められているのがわかり、志穂は思わず口に溜まった唾をごくりと飲み込んだ。

元恋人ならば一線を超えるのはたやすい。彼はきっと、噂が落ち着くまで、身体の関係を含めた大人の付き合いをしようと言っているのだ。恋人というより、セフレのようなものかもしれない。

「本気ですか？」

「本気に決まってる。それとも、俺と付き合うのはいやか？」

「……そういうわけじゃ」

「じゃあ、いいな」
惣は断られるとは思ってもいないのか、自信ありげに言う。
彼の提案は、状況を打開するにはベストに思えた。冷静に考えれば、志穂にとってメリットしかない。仕事を辞めずに済み、ストーカー疑惑も解消される。
「惣は、それでいいの？」
気づくと、口調が昔に戻っていた。出会った頃を思い出したからだろうか。
久しぶりに惣と呼んだのに、まるで空白の期間などないように感じた。彼の口調や態度が付き合っていた頃を彷彿とさせるからかもしれない。
「いいよ。あいつらに見せつけてやればいい」
惣は、口の端を得意げに上げて笑った。
いつだって前向きで自信家で、志穂はそういう彼が好きだった。自分にないものを持っている惣が眩しく映った。あんなことがあっても、自分の中で彼の存在は特別なのだと改めて思う。
「……まぁそのうち、あの男なんて目に入らなくさせる予定だしな」
「え？」
意味がわからず聞き返すと、なんでもないと首を振られた。
「で、どうする？」
たとえ身体だけの恋人関係を求められているにしても、彼は自分を救ってくれた。隆史の裏切りはどうしたって許せない。惣が諦めるなと言ってくれるのなら、その手を取ろう。

「わかった……よろしくお願いします」
「よろしくな」
差し出された彼の手を握った。
メインの料理もデザートも食べ終えると、あっという間に二時間が経っていた。そういえば、昔もそうだったなと頬が緩む。
（惣と会ってると、いつも時間が経つのが早かった。共通の話題なんて全然ないのに、いろいろ話してたらあっという間で、びっくりしたんだよね）
いつの間にかグラスを空けていて、アルコールで気分がふわふわする。
会計の伝票がテーブルに置かれ、ちらりと見えた支払額に仰天する。さすがに五万円を超えるとは思っておらず、持ち合わせがなかった。
「あの、カードで払ってもいい？」
「お前に払わせるわけないだろ。この店を指定したのは俺なんだから」
大学時代の食事代は割り勘だった。彼は上司で役員で、給料だって当然志穂とは雲泥の差があるだろう。けれど、たった三歳しか離れていないのに、追いつけない距離を感じると悔しくもあった。
「そんなに払いたきゃ、出世しろ」
こつんと軽く頭を叩かれて、彼はさっさと支払いを済ませてしまう。複雑な胸の内を見透かされて頬に朱が走った。
（なんで惣にはわかっちゃうの……）

感情が表情に出にくい志穂の気持ちを、彼はいとも簡単に当ててしまう。志穂はわかりやすいと言って。

「ごちそうさまでした。いろいろとありがとう。それで、私はどうすればいい？」

志穂は肩にかけたショルダーバッグの紐をぎゅっと掴み、決戦に立ち向かうような心地で口に出す。彼に返せるものなどなにもないかもしれないが、なるべく惣の希望に添えるように振る舞うべきだろう。

「そうだな。一つだけ」

「うん、なに？」

エレベーターホールに向かう途中で足を止めた彼が、志穂を振り返る。

ふいに惣の顔が近づいてくる。避けようもないくらいに自然な動作で、久しぶりに嗅ぐ惣の匂いが鼻を掠めた。

「せっかく恋人になったんだし。まずは今夜、身体の相性を確かめようか」

耳の近くで声を潜めて言われ、かっと頬に熱が走る。冗談を言わないで、と返そうとするが、すぐ近くにある彼の顔が思いのほか真剣で、志穂はこくりと唾を飲んだ。

「あい、しょうって……」

「わかるだろう？　学生のときとは違うんだし、大人の付き合いをしよう、志穂。それに……俺も昔ほど悠長には待ってやれない」

まさかそんなにすぐ身体の関係を求められるとは思っていなかった。だが迷ったのは一瞬で、仕事のためとはいえ、自分を助けてくれた彼の求めに応じることに抵抗はない。

「惣は……したいの？」

多少の照れくささから目を合わせないまま聞き返すと、はっきりとした口調で返される。

「したい」

（大人の付き合いか……そういう割り切った関係の方が、私には合ってるかもね……）

たしかに学生のときとは違うなと、志穂は胸の内で苦笑する。あの頃は、惣と手を繋ぐだけで緊張していたのに、そういったことにも慣れたのだなと感慨深く思う。

志穂が黙っていると、なぜか昔から志穂の感情を言い当てるのが得意な男は、その気持ちを見透かしたように腰に腕を回す。

「俺は志穂を抱きたい。志穂は？」

強引に顎を持ち上げられ目と目が合う。しっかりと顎を掴まれていて、目を逸らすことは敵わない。頬を撫でられると、身体の奥が甘く痺れるような感覚が走った。

惣と一緒に仕事をしていても、過去を思い出さずにいられたのは、彼に女性に対する欲をまったく感じなかったからだ。

けれど今は違う。志穂を見る彼の目はたしかな劣情を孕んでおり、頬を撫でる手はまるで女性の身体を開いているときのように淫らだ。

「俺に抱かれたいって言って」

率直すぎる物言いに、ますます身体の芯が火照っていく。惣に求められていることが嬉しかった。

立ち読みサンプルはここまで